

美の復権と生命の讃歌

人間の港

特集 美術紀行 北海道・厚田
北の海・
白波よせる日本海

CONTENTS

巻頭エッセイ
特集 美術紀行 北海道・厚田
四季の彩り 29
美術史探訪 29
源流の輝き 36
龍の軌跡 34
田淵隆三のルネサンス讃歌 16
対比の美術 36
連載エッセイ
会員寄稿
注目の展覧会
会員ニュース

第77号

2021

冬

Vol.20
No.4

田淵隆三『小松昭夫氏肖像』油彩 F12 2020年2月

雲で覆われた出雲に、太陽の国イズモを語る人がいた。
楽しくゆかに天寿を全うできる地球社会を願って、
太陽の道を歩む人がいた。
「知ってやる人」は「好きでやる人」にはかなわない。
「好きでやる人」は「楽しんでやる人」にはかなわない。
おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかに
「平和 環境 健康はひとつ」を世界に発信する。
事業を通じて世界に喜びの輪を広げている。

中道主義と
芸術

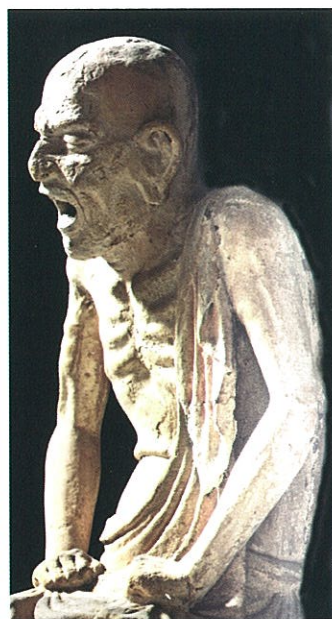
中道主義と芸術

田淵美術工房主宰
八王子グループ代表
田淵 隆三

人間とは何か
生命とは何か
このことを知るところに我々の芸術の眼目がある
中道主義は資本主義でも共産主義でもない
あらゆる考え方を止揚しながら
生命の尊厳に向かう力である
生命の本質は「空仮中円融の三諦」という
この生命を中心とする思想が中道主義であり
人間主義である
真実の仏法は生命の法則にのっとった円教である
自然と人間と宇宙の大地に生まれた誰人も無視できない
円融円満で完全無欠の哲理である



田淵隆三『円盤を投げる青年像』



『塔本塑像』法隆寺五重塔
*「聖徳太子と法隆寺」展図録より

千四百年前、日本に飛鳥文化が誕生した
我が国に誕生した最初の仏教文化である
時の指導者聖徳太子はなかでも法華経を尊び
『法華義疏』（『三経義疏』のうち）を著し自ら講じた
太子創建の法隆寺とその諸像や
「和を以て貴しとなす」との十七条憲法は
法華経を基礎に誕生したといえよう
眼に見える文化の形の出現によつて
はじめてこの国土に仏教が定着した
すらすらと長身の『百済観音像』
長い間秘仏とされ
明治になるまで見ることでできなかった『救世観音像』
すごい彫刻の出現があった、国土に大輪の花が咲いた
さらにこれは
七一年（和銅四）白鳳から天平初期の作であるが
法隆寺五重塔の『塔本塑像群』がある
彫刻が皆、生きている
驚くべき創作である
四方に配された四場面のうち北面の「釈尊入滅」
弟子らの泣く声が聞こえるようではないか
以来五百年、鎌倉時代に日蓮大聖人が聖誕され
末法の法華経、生命根源の法が説かれて
『立正安国論』が著された
桃山時代、この哲理の下に
狩野永徳、長谷川等伯、本阿弥光悦、俵屋宗達が生まれ
さらに江戸時代、世界に冠たる東洲斎写楽、
葛飾北斎の誕生を見るのである

実に世界に誇る美の巨人たちの出現である
今、日蓮大聖人の聖誕から八百年
この国土に今再び
立正安国の精神の支柱が要請される時が来た
我々のいのちを変える大法がある
最高の芸術が出現するに違いない

今年、秋十月になっても暑い日が続いている
じりじりと地球が病んでいる
温室効果ガスの増加やオゾン層の破壊が
奇しくも
二酸化炭素の増加が気温上昇に關与しているとの
気候変動モデルを発表した真鍋淑郎博士が
今年のノーベル物理学賞を受賞された
しかし突き詰めれば我々の欲望の結果である
我々の持つエゴと増上慢のいのちを
慈愛あふれるいのちに変える以外に
我々の住む地球を守ることはできない
あらゆる革命の根源に人間がいる
その人間の生命を変える哲学が要請されるのである
それこそ法華経の真髓にあたる
人間の持つ一念によつて世界は変わるという
十界互具と一念三千の法理である
若きいのちに要請されるのは
アニメの人形の時代ではない
円教に基づく『円盤を投げる青年』が相応しい
未来は新しい青年の躍動する時だ
古代ギリシャの彫刻やミケランジェロの
大きい動かない彫刻から
動く彫刻の時代へ
土のなかから太陽を出す
そんな彫刻の出現を願っている
我々の未来の生命のルネサンスを呼び込みたい
今こそ世界が変わる時だ



北の海 白波よせる日本海

中道主義と芸術

3年ぶりの北海道・厚田
水彩画展大賞に選出の拙作『厚福丸と漁村庭』が
市の広報の表紙を飾り人々の知るところとなっていた
歓びのいのちを広げ法華経哲学展開の一助となれば有難い
祈り願いつつ漁港で新たな筆をとって来た

《画・文》田淵隆三

『厚福丸と漁村庭』アクリル P25 2021年

1 白波よせる日本海

令和三年（二〇二一年）九月
二十九日、千葉沖を台風が北上す
る不安定な気候のなか、羽田を発つ
て千歳に到着、札幌に一泊して
三十日、六泊の予定でなつかしい
厚田に三年ぶりにやって来た。
夏に開催された厚田（石狩市厚
田区）の地域住民による実行委員
会主催の水彩画展「第五回『北の海』
厚田アクアレール」（七月二十五日
から八月八日）に応募して大賞に
選出されながら、コロナ禍のなか、
私は表彰式には出席できなかった。
その作品『厚福丸と漁村庭』は、

2 天の采配

道の駅の二階に、厚田に生まれ
た横綱・吉葉山の大きな看板があつ
て、そこが厚田の郷土を紹介する
展示場となっていた。
大作家・子母沢寛（しもざわかん）
や戸田先生といった厚田出身の各
界の偉人の方々のパネルが飾られ
てあり、この一角に、今回の水彩
画展での受賞作八点が飾られてい
た。

そのなかの中央に拙作『厚福丸
と漁村庭』があった。
よくぞ選んでくださったと、感
謝でいっぱいであった。
今まで私は、公の展覧会で賞に
選ばれたことはない。

展覧会場となっていた道の駅「あ
いろーど厚田」に飾られており、
念願であつたわが作品との厚田で
の対面を叶えることができた。
大きく開いた会場は、眼下に漁
港を見おろす高台にあり、大きく
とられた窓により自然との一体感
があつて、実に気持ちが良い。
すぐ上の台地に戸田城聖先生が
少年時代を過ごされた住居が移転
されており、そこにも初めて登つ
て来たが、白波よせる日本海の光
景が開ける素晴らしいところだ
あつた。

生涯に一点しか買われなかった
というゴッホと同じで、これまで
ほめられたことがない。
八十を前に、初めてトップの大
賞の受賞である。何だかカタハラ
痛い。

他の人の作品と違って、近くで
見たのでは解らない。
うまいか下手か、空間も動きも、
調子も、距離を置いて離れて見て、
やっと鮮明に解ってくる。
この作品を評価いただいた選者
の方々に、敬意を持ってお礼を申
し上げたい。

三十九歳から四十二歳に制作し
た十体の彫刻が、沖縄・恩納村の「世



『厚田漁港 鮭上がる』油彩 F15 2021年10月

界平和の碑」の平和像として、世界不戦のしるしとして設置されているが、これは天の采配ともいべきもので、ただただその不思議に深く感謝するのみであった。

私には「断じて第三のルネサンスを」と、深く心に期すものがあって、この頃、彫刻を公募展に出品していたのだが、あえなく落選を続けていた。沖縄の米軍核ミサイル基地跡の元発射台に設置された平和像のうち二体は、その落選作である。

それは、勤務の創価学園の創立者、池田大作先生が目にとめてくださり「世界平和の碑」を飾る彫刻にと選んで、「平和英知の像」「平和凱歌の像」といった具合に次々と命名していただいて日の目を見ることがとなったものであった。

その際の池田先生の言葉は「本物は世間で解るのは二百年



『平和英知の像』1984年、沖縄の現地に設置前に撮影（左後方に写る『平和躍動の像』とともに「落選作」であった）

先だ」であった。それを聞いて私は「今生ではダメだ。生まれ変わった来世を待たない」と、覚悟していたものだから、齢八十にして、師匠にゆかりの厚田で評価していただくとは、何ともありがたきことである。

さらにこのたび、拙作『厚福丸と漁村庭』が北海道石狩市の広報『いしかり』十月号の表紙として掲載された。

この広報は、石狩市内の全世帯二万八千世帯余に全戸配布されたという。

「仏とは生命なり」との戸田先生の獄中での悟達によって、難解であった法華経哲学が現代に蘇り展開し始めたわけであるが、拙作の図版が市内に全戸配布されるとは、その法華経哲学展開の一助となれたのであれば、望外の出来事であり、感謝に堪えない。



広報『いしかり』10月号表紙

3 龍宝丸

厚田の港に降りていった。ここが私の絵を描く定番のところである。

港の一角になつかしい龍宝丸が泊まっている。船は泊まるところが決まっている。その奥が厚田丸で、ちょうど鮭が上がっている。

朝早くから働いている漁師の方々のなかに入って、鮭を一匹わけてもらった。鮭が今、高騰していると聞いていたが、顔見知りの方がいて、安くしてもらえた。

嬉しい人間のつながりである。北海道の太平洋に面した海岸では、鮭の大量死が問題になっていると、ニュースで報じられていた。

海水温が一度上がるだけで赤潮が発生、ウニが白化して海底に死骸が広がっていると伝えていた。

人間の為すゆがみが大きな問題を引き起こしている。

一方で、日本海側の厚田の海は、そんな事態にまだ至っていない。

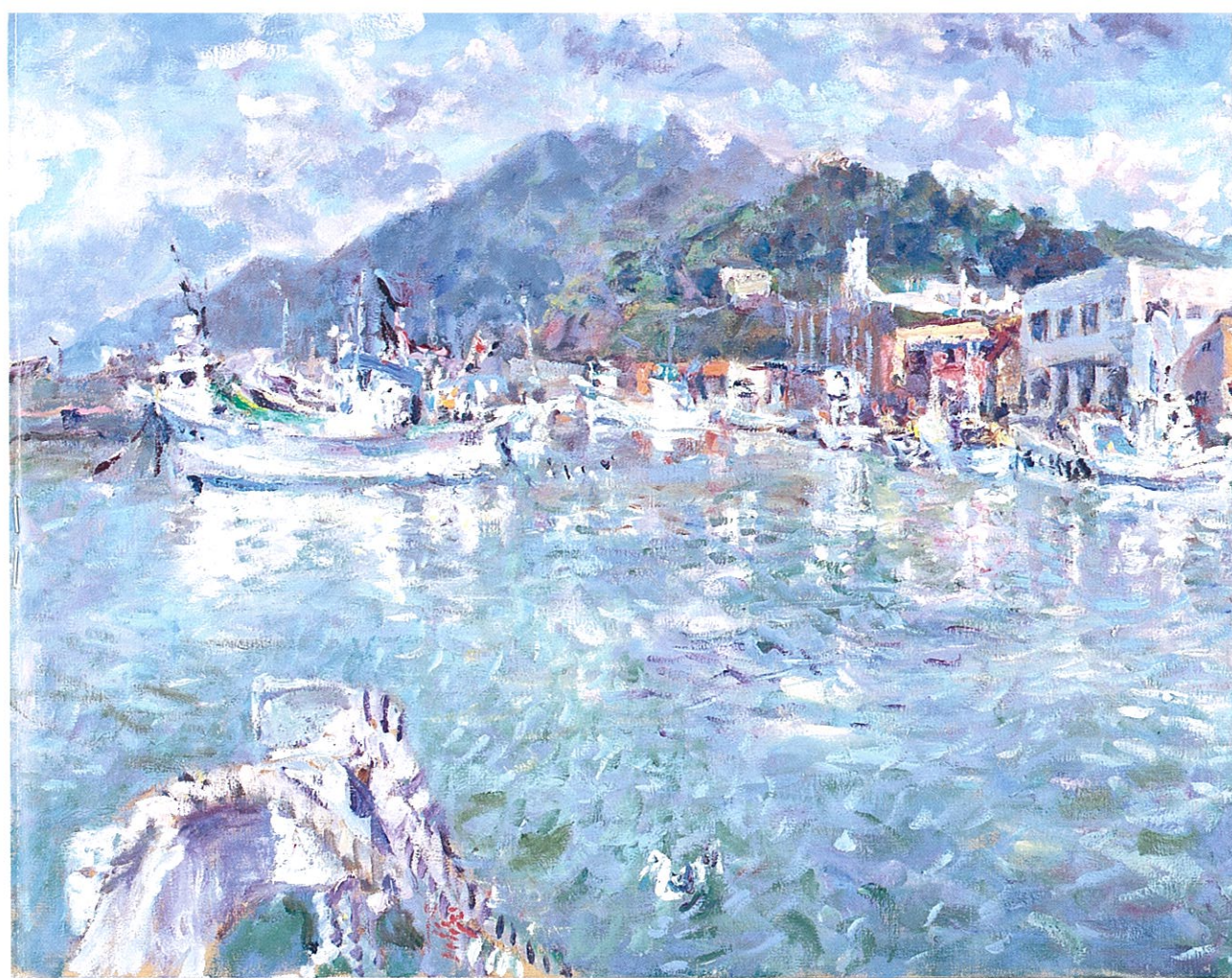
風が起こればウミネコが騒ぐいっせいにカモメが浮き立つ壮観である

ここでは自然が生きている黒雲を呼んで豊かな自然がある海が生きていれば龍宝丸に大漁旗を立てたいものである



『厚田漁港 龍宝丸』油彩 F15 2021年10月

美を持たない哲学はない
哲学は美の誕生をもって完成する
万人に見える花となって世界の哲学となる



『厚田漁港 カモメ遊ぶ』油彩 P20 2013年9月

四季の 彩り

29

ほおづき灯ろう

絵・文 那須 亮子

秋もなかばをすぎる頃
ほおづきは虫にくわれて
すじだけが残り
小さな灯ろうが
あちこちにとまります

元

『ほおづきに赤トンボ』



美術史
探訪

29

2450年の後に

松岡 健太郎



パルテノンフリーズ《犠牲獣を引く人々》
紀元前5世紀中頃 筆者撮影

「現在の人々が我々を見て驚くように、後世の人々も我々のなしたことに驚くであろう」古代ギリシャの指導者ペリクレスの言葉だ。後世としての今日、かのアテネ黄金時代を実感し得る遺産は、何より古代の「美」だろう。私は、今は懐かしいアクロポリスに思いを馳せる。「ペントリコンの大理石に結晶したギリシャ精神」のパルテノン神殿は、この瞬間もエーゲ海を臨んで輝いているに違いない。

神殿だけに絞ってもその魅力は尽きないが、中でも内側上部に施されたフリーズ彫刻は、激しい破損にもかかわらず古典期の時代精神が面目躍如である。神話伝説の破風やメトープと異なり、ここではパンアテナイア祭という「現実の行事」が描かれる。現在はギリシャ・フランス・イギリスに散在、繋げば東西南北計約一六〇メートルの長さに天地約一メートルの巨大レリーフとなり、その縦横

美とは平和と繁栄の象徴である

古代ギリシャの神々は美を愛し

人々は競って神々に美を捧げた



『厚田漁港 龍宝丸と秋鮭』油彩 P20 2013年9月

比率は日本最長の絵巻とされる横山大観《生々流転》の1対72を、二倍以上の1対150と完全に圧倒する。彫られた人物の数、実に三五八名、馬の数二〇頭。出発前の市民、後続を気遣う兵士、疾走する騎馬群、そして朝日に近い東壁面にオリンポス十二神が現れその神威は最高潮を示すという心憎さである。

とりわけ、アクロポリス美術館にある北壁面の「犠牲獣を引く人々」を私は忘れることができない。生贄として命果てるための行進にもかかわらず犠牲獣の牛は自ら勇んで跳躍し、神前に詣でようとする。その健気さには一片の悲壮もない。なだめる青年は若きもろ肌を露わにし、先行の人物は顎まで衣服で隠し、あくまでも静々と摺り足で進む。何という敬虔な信仰心であろうか。

フリーズは十メートルの柱の上に設置されるがゆえに、見えやすくするためレリーフ下部より上部の方が深彫りだと言う。だが考えてもみよ、フリーズの眼前には内壁がそびえる。紀元前五世紀の当時、この浮彫を極度に暗い神殿内でいつたい誰が見たというのか。

浮彫を見つめた者。それは神であった。古代ギリシャでは正に、美は神への捧げものだったのだ。ペリクレスの言う古代ギリシャのなしたことは、「神」に捧げられる美の創出だったのだ、とあらためて思う。そして二千四百五十年の時を経て、私達は今、「生命そのもの」に捧げる美の創出を目指すべき時が来ているのだ、と思う。

「一瞬の生命に全体がある」



『伊豆の山中』水彩 F2号 1976年

如^{によう}と現われる生命を

「如来」という

これよりほかに

生命の実像はない

如是相のなかに一切がある

絵画とは

それをつかむことである

生命の過去と未来は

ここにある

いまここに

大事な宝がある

この一瞬を

如実知見することだ



【中島祥行先生のプロフィール】

1896年（明治29）、静岡県沼津の生まれ。後、横浜に出て古材木業を営む。絵を志し、洋画家の青山熊治に師事するが、家業のために専念できず、一財をなした後、晩年の十数年間に画業は集中している。田淵代表との出会いは、1963年（昭和38）秋、中島先生が67才の時、ちょうど画業に専念し始めた頃にあたっている。1976年（昭和51）逝去。享年79。

龍の軌跡 ③④

ロンドン 三日間の地球俯瞰

一九九六年（平成八年）八月二十日、アフリカ大陸を縦断し地中海を越え、午前七時半、一行十一名はロンドン、ヒースロー空港に到着した。帰国のための経由地としての立寄りであったが、ロンドンは初訪問であり、どうせならと帰国便を二十三日として実質三日間を確保した。ここでは治安状況や交通機関など諸情報を得るため、迎えのみガイドを頼んだが、あとは広大なハイド・パークに隣接するカンバーランド・ホテルを拠点にメンバーのみで行動した。

なった『ロゼッタストーン』、ミケランジェロやミレーやゴッホの素描、インドのガンダーラ、中国の唐などの仏教彫刻、北斎や岡芳などの浮世絵、アッシリアの彫刻等々と、ランダムに足を止めてはデッサンをしていると、一番の見どころである「エルギン・マーブル」パルテノン神殿の破風彫刻にたどり着いたのは、閉館時間十分前であった。

初日、地下鉄を使って午後二時に到着すると、まず、古代ギリシャ神殿を模した建物正面の造り、入場料を取らない（寄付は受ける）施設の姿勢等を見て、入り口から英国の気概の深さを感じた。

一行は「誰もが称賛せざるを得ない」、古代ギリシャの説得力に圧倒され、いくら高度な思想も美という形になってこそ説得力をもつことを改めて教えられたのであった。

足のおもむくままに、ラムセス二世像をはじめとする古代エジプトの彫刻や壁画にヒエログリフ解説の手がかりと

田淵は、帰国後、それら彫刻のデッサンをもとに、数点の彫像を制作、後年にはそれらに頭部を加えて等身大の彫刻にしている。そのなかから

男性像の『イリッソス』（西側破風「アテナとポセイドンの争い」のうち）をもとに『山の精』として制作し、岡山県鏡野町の山田養蜂場の里山再生事業での「生命の森ミュージアム」の彫刻群の一体として鑄造・設置（二〇〇七年）されている。

その夜は、田淵と分れて五名がミュージカル『レ・ミゼラブル』を劇場で鑑賞。本場の俳優達の圧倒的な肉声に機械を凌駕する人間の能力のすごさを痛感させられるのであった。

三日目、二十二日は、地下鉄と路線バスを使って、ターナー作品を多く所蔵するテート・ギャラリー、印象派の名品を持つコートールド・インスティテュート・ギャラリー、そして



『トラファルガー広場』水彩 1996年

レオナルドの下絵『聖アンナと聖母子と幼児聖ヨハネ』などを有するナショナル・ギャラリーを、駆け足で見まわった。最後のナショナル・ギャラリーを出るとトラファルガー広場があり、そこにはナポレオン時代のフランス艦隊に勝利したネルソン提督の記念柱があった。バックには訪れた南アフリカの大使館に国旗がはためき、夕空には細く白い月が浮かび、一行は感慨に浸りつつ一時間ほどスケッチして旅を締めくくった。

例えば、香港、南アフリカ、ジンバブエ、そしてイギリス本国と、かつての大英帝国の領土をまわった旅であった。略奪者であるとともに保護者であり、功罪なかばといえるであろうが、大英帝国の大きさを体感し、博物館に地球上の最高峰の文物を集めたその力量を実見して、大いに学んだ旅であった。

午後二時前の英国航空の便に乗り、翌二十四日午前九時頃、無事に成田空港に到着。

【文「龍の軌跡」編纂委員会】

田淵隆三の

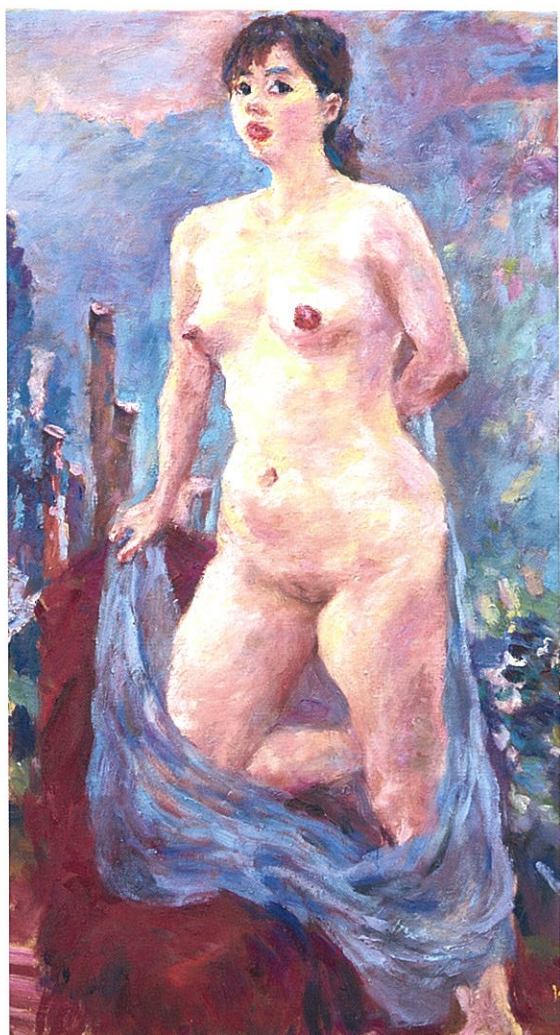
ルネサンス

讃歌 16

「若きいのち」



『希望の前進』(部分) 油彩 M10 2020年4月



『希望の青春』(部分) 油彩 M20 2021年7月

「希望」がある「喜び」がある
真実に生きる希望の前進

宿命転換の妙法とともに
人に喜びをもたらす光り輝く世界がある

経験はないのだが、ゴルフの話の話を今回はしたい。
それは今年（二〇二二年）春のこと、イサムさんと
いう八十三歳の現役アマチュアゴルファーが山口県の
下関におられて、サンロータス研究所の竹岡誠治さん
の誘いで、その方を「アンチエイジング」の模範とし
て本にするお手伝いをする事になったのである（下
欄をご覧ください）。

お会いして驚いた。五十代ぐらいにしか見えない。
歩みは追いつけないほど速く、シニアの大会に出れば、
二十や三十歳若い人たちと互角に闘う。その裏には
一八〇度開脚する柔軟トレーニングなど日々の並外れ
た鍛錬があった。威張りもせず、ユーモアさえある。

現地で三度取材し、また、関連書籍を読むなかで多
くを学ばせていただいたが、そのなかで、ゴルフの本
質には「あるがまま」の精神があることを知った。

それは、球がどこに飛ばうか「あるがまま」を受け
入れて、そこから次の一打をしなければならぬとい
うもの。とても無
理な状況なら「ア
ンプレヤブル」を
宣言して、一罰打
が科せられる。

今日のゴルフの
発祥地は、スコッ
トランドである。

原資料を求めて
世界を巡りゴルフ
の本質を探究した
エッセイストの夏



ジャン＝フランソワ・ミレー『春』1863～73年

「あるがまま」の精神があることを知った。
それは、球がどこに飛ばうか「あるがまま」を受け
入れて、そこから次の一打をしなければならぬとい
うもの。とても無
理な状況なら「ア
ンプレヤブル」を
宣言して、一罰打
が科せられる。

坂健氏によれば、彼の地ではゴルフの掟は二カ条に集
約され、その一つが「あるがままにプレーせよ」なの
である。（もう一つは「自分の有利にふる舞わないこと」）
このスコットランドのゴルフ場の始まりの地といえ
ば「リンクスランド」と呼ばれる「海からの強風にさ
らされる砂丘がベースで、大地は荒波のようにうねり、
あちこちに歳月の穿った巨大な砂溜まり（バンカー）
が点在する」ところ（夏坂健『アンプレヤブル！』）。
私も訪れたが、スコットランドは高緯度にあるため
に夏でも日が陰れば寒く、一日の天候の変化がめまぐ
るしい。それに強風と土地のアンジュレーション（起
伏）が加わって「試練に次ぐ試練、挑戦に次ぐ挑戦」
リンクスには永遠に飽きない魅力が充滿して私たちを
虜にする」という（ウィリー・パーク・ジュニア『The
Game of Golf』より、同『ゴルフへの恋文』所収）。「あ
るがまま」は大変であるが、それに挑戦して打ち克つ
ことがゴルフの喜びであって、難しいからと球を
ちよつと動かしたりすれば、せつかくの楽しみを味わ
えなくなるといふのだ。

さらに「あるがまま」を守るゴルフ人は「自然に対
する畏敬の念が深まったのは当然として、毎日接する
空、雲、風、草木から、人知の及ばざる大きな世界が
あることを教えられました」となっていく（ゴルフ場
のグリーンキーパーを長年務めた池端通人の言葉、同
『ゴルフを以って人を観る』所収）。自然の美を愛する
ようになるといふのである。スコットランドの格言で
は「コース美が分からぬ者は、その人の心に欠陥があ
る証拠」とまでいわれている（同『ゴルフの神様』）。
イサムさんも、ゴルフ場で見える自然の美しさに感動
し、いつしか美術にも親しむよ
うになったという。

書籍ご案内 『ゴルフこそわが人生 イサム八十三歳の挑戦』 サンロータス研究所から限定発売

松浦正人氏（元防府市長）と竹岡誠治氏が共同で製作委
員会を立ち上げ、一般社団法人ALCO（アンチエイジ
ングリーダー養成機構）が発行、一般社団法人サンロータス
研究所が発売するものです。A5判、オールカラー102頁。
約50冊のゴルフ関連書籍からエッセンスを抜き出した
別冊「ゴルフ読本」（竹岡誠治編 148頁）が付きます。
価格：2,000円（2冊組、税・送料込）



連載
エッセイ

人間革命の美術1

落合 聡

「落合は、絵かきにならないか」。私が創価中学
2年の時、美術の授業終了後に教科担任であった田淵
先生から投げかけられた言葉です。私はとっさに「嫌
です！ 僕は教師を目指します」と答えていました。「落
合はしっかりした絵を描くなあ」と認めてもらったの

は嬉しかったので、「はい、職業にはしませんが、生涯
取り組んでいきます！」というべきだったと後悔して
いるのですが、「嫌だ！」と言ってしまったのは、絵か
きなんかには絶対になりたくない」という常日頃から
の思いがあったからでした。それは、「教員」が第一志

望で「絵かき」は第二志望より下という選択の問題で
はなく、画家・芸術家と呼ばれる人たちの人間像への、
私の率直な嫌悪感からくるものでした。
私が中学2年の時に持っていた画家・芸術家のイメー
ジは、「個性・感受性が強く、自己中心的・独善的な
おかしな人」で、明らかにネガティブなものでした。
それを目指して努力したら、「まともな人間・立派な人
間になれなくなるのでは？」と危惧していました。実は、
62歳になった今でも、このネガティブイメージと危惧
は持ち続けています。10分の1は私の無認識・偏見の
産物だとして反省し、認識を改めていますが、10分の
9は残念ながら、現代社会の実状として当たってしまっ
ているのではと思っています。

田淵先生の美術の授業を創価中学・高校と受け続け
る中で、美術史の解説や名作鑑賞の場面で「東洋の王
維（中国・唐時代）は、国家官僚で詩画に優れた超一
流の文人政治家だった。東洋の仏教文化のもとでは一
流の人間が絵を描いていた」「レオナルドは、万能の天
才なのだけれど、自身が画家であることを最も誇りと
していた」「ゲーテは視覚の芸術家を知性ある人として
最大限に賞賛した」等を聞かせていただきました。

これらの話題に接しながら、画家や芸術家の中には、
人間的に優れ、人並み以上に立派な人があるというこ
とを信じられるようになりました。何よりも、その人
たちの作品や生き方が素晴らしいことに魅了されまし
た。ただ、謎も深まりました。人並み以上に立派な人
を産み出せる美術と、自己中心的・独善的な、おかし
な人を産み出してしまふ美術と、何が違うのだろうか
と。

美術は素晴らしい。でも、目指すべき「10分の1」と
採用してはならない「10分の9」の違いがわからない
ままだと、努力の末に自分の人生を棒に振ってしま
いかねない——人生を賭けた実践と思索の旅を始めま
した。

会員
寄稿

ニホンミツバチ

陶芸家 渡辺節夫



田淵隆三『渡辺節夫氏による金継ぎを施した国産準之助作
「湯呑茶碗」と岩谷産「百花蜜」』水彩 F3 2021年10月

ブンブンブン、ハチが飛ぶ。
四年前からニホンミツバチを
趣味で飼っている。

春の日、メスの働きバチたち
は、さながら航空母艦の戦闘機
のタッチ - アンド - ゴーよろ
しく見事な発着光景をみせてく
れます。

桜の咲くころ、巣箱の周りに
ハチの群れが飛び回り、近くの
木の幹に集結状態（蜂球と言う）
になります。

蜂球は一匹の女王と千匹程

特別展「ポンペイ」



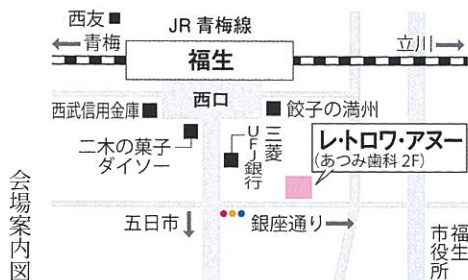
会期:2022年1月14日(金)～4月3日(日)
午前9時半～午後5時
休館日:月曜日、3月22日(火)
(3月21日・28日は開館)
会場:東京国立博物館平成館(上野公園内)
観覧料:一般2100円、大学生1300円、
高校生900円、中学生以下無料

*日時指定予約制。指定券購入方法は展覧会公式サイト参照

西暦79年に火山噴火で都市ごと埋もれたポンペイ。ナポリ考古学博物館の全面協力で『サッフォー』など代表作を含む約150点が展示。「ポンペイ展の決定版」ともいえるべき展覧会となっている。古代ギリシャ・ローマ絵画の実際を知る貴重な機会である。

第21回高橋誠一・亀田潔2人展

会期:2022年2月16日(水)～21日(月)
午前11時～午後7時(最終日5時半まで)
会場:レ・トロワ・アヌー
東京都福生市本町127野口ビル2F
電話042(553)6417
JR青梅線福生駅西口より徒歩3分
(駅前信号、銀座通りを南、あつみ歯科2階)



神山茂久 個展

会期:2022年2月10日(木)～15日(火)
午前11時～午後6時(最終日は4時まで)
会場:コートギャラリー国立 *両展覧会の会場は同じです。
東京都国立市中1-8-32
電話042(573)8282
JR中央線国立駅南口より線路沿いを立川方面に徒歩2分



五人展

五人展出品予定者:

小山内繁
貝賀友治
武田博昭
川原隆寛
能地 浩

美術工房ニュース



『草木文明論』(奇跡のもんげーバナナ 農業と芸術の対話) ネット通販アマゾンから販売中

岡山で国産バナナを可能にした「凍結解凍覚醒法」の開発者田中節三氏と田淵隆三の対話記録集です。

草木(植物・芸術)に学ぶことで生命尊厳の文明への転換を促す、1つの文明論となっています。植物からの

示唆と法華経哲学との類似性についての考察もあります。

出版元:一般社団法人サンロータス研究所

*ご購入は、アマゾンのサイトからご注文ください。(お問い合わせは美術工房で承ります) 価格:2,860円(税込)。

人間の港 冬季号

2021年11月23日発行、Vol.20 No.4

- 発行人:田淵隆三
- 制作:川北茂
- 執筆:田淵隆三、那須亮子、落合聡、松岡健太郎、渡辺節夫、川北茂
- 制作補助:亀田潔
- デザイン:吉永聖児
- 発行所:田淵美術工房 有限会社 広隆社
〒198-0036 青梅市河辺町10-12-57-3F
電話:0428(78)4830
FAX:0428(78)4831
E-mail:tabuchiart@gmail.com

年間購読のご案内

◇発行概要

- 1.発行頻度:季刊(年4回発行)
- 2.年間購読料:1件(2部×4回)、5,000円
※現在、皆様の要望から、1件につき2部ずつお送りしています。
- 3.支払方法:一括前納で下記郵便振替口座に入金をお願いいたします。

〈郵便振替口座〉

口座番号:00180-1-500417

口座名:有限会社 広隆社 [ユ] コウリュウシャ

※購読料の振替手数料は購読者負担でお願いしております。

※お申し込み・お問い合わせ 田淵美術工房、(有) 広隆社

編集室からのお知らせ

本号で2022年度の初回となります。新年度もよろしくお願い致します。ご感想、ご意見、各種投稿、お待ちしております。(手紙、メール、ファックスなど、いずれも可)